

「生物多様性から獣害対策を考える」 谷口美洋子（埼玉県秩父農林振興センター）

行政研究部会セミナーが、平成22年3月27日（土）アットビジネスセンター東京駅八重洲口を会場に、NPO法人地域自然情報ネットワークとの共催で開かれた。

講師には小寺祐二氏（長崎県農林部農政課鳥獣対策専門員、現在は宇都宮大学農学部附属里山科学センター特任助教）と、山田昌宏氏（株式会社地域環境計画九州支社哺乳類担当）のお二方をお呼びした。

行政研究部会では「獣害対策の包括的マネジメントシステムの構築」を目指して活動を行っている。今年が生物多様性年であることから、このセミナーでは生物多様性をキーワードとし、獣害を生物多様性との関係から考える機会とした。背景には、昨年植生学会と野生生物保護学会共催でシカによる食害問題のシンポジウムが開催され、植生被害の実態が明らかにされつつあるものの、鳥獣による小型哺乳類・昆虫類、爬虫類・土壌動物・陸産貝類などの採食が生態系・生物多様性に及ぼす影響は、情報も少なく実態がつかめていないこと等がある。

小寺氏の講演「農業における鳥獣対策と生物多様性」では、農業生態系というものが、①人間により補助エネルギーを与えられている、②特定の生産量を上げるために生物多様性が最低限に抑えられている、③動物植物は人為淘汰されている、ことが

説明された。よって農業生態系における生物多様性が高まると、鳥獣による被害が増える可能性がある。今回はこれらが、生態系の話の中でも忘れられがちなエネルギー流とともに説明された。また、都市生態系には処理できないほどの量の燃料エネルギーや物質の移入があること、農業生態系と共に自然生態系の支援が必要であることが説明された。

生態系と経済の関係についても、①エントロピー概念が欠如していること、②無限の資源が前提とされていること、また、エネルギー消費による拡大再生産が経済的価値の生産と

なり、その結果自然領域が縮小することが説明された。この経済的・社会的における農業の特徴として、経済学的利益が追求され、その生産過程では高い経済効率を求められること、その結果エントロピーの高低は問わないモノカルチャーによる生産となり、生物多様性の保全と対立することが説明された。

自然生態系に対する負荷が少ないと思われる生活として、少人数による狩猟採取やアグロフォレストリーがあげられた。山田氏の講演「佐賀県で捕獲されたアライグマ72頭の胃及び直腸内容

物から生態系被害を考える」では、佐賀県内のアライグマについて、ワナ等による生息確認地点、胃内容および直腸内容物について報告された。ヤマアカガエル等の重要な両生類とアライグマの生息確認地点が重なっている箇所が24箇所あることも分かった。生活環境被害や農畜産被害箇所、アライグマが牛のエサや廃棄ミカンを目当てに出没していることも写真で確認された。

本セミナーが開催されたのが年度末だったにもかかわらず、約30人の参加があり、活発に質疑応答が行われた。

物から生態系被害を考える」では、佐賀県内のアライグマについて、ワナ等による生息確認地点、胃内容および直腸内容物について報告された。ヤマアカガエル等の重要な両生類とアライグマの生息確認地点が重なっている箇所が24箇所あることも分かった。生活環境被害や農畜産被害箇所、アライグマが牛のエサや廃棄ミカンを目当てに出没していることも写真で確認された。

「2009年野生生物10大ニュース」の選定について

行政研究部会が昨年末に選定しました。部会幹事会で候補を選定し、部会員（準部会員を含む）によるネット投票で決定しました。毎年の事件をまとめておくことは資料的な意義も高いと考え、今後も毎年恒例にしたいと考えています。

2009年野生生物10大ニュース

※ 順番は得票数ではなくニュース発生日です

- ラッコのクーちゃんて釧路川賑わう（2月）
- 鹿児島本土でマングース初確認（6月）
- 白山で70年ぶりにライチョウを確認（6月）
- 日獣大と群馬県が野生動物対策協定（6月）
- 乗鞍で観光客9人がクマに襲われる（9月）
- 政権交代で環境政策にも大転換（9月）
- 鞆の浦の埋立架橋、一審で差止判決（10月）
- 佐渡放鳥トキが集団化、本土飛来も（10月）
- 鳥獣害対策等も事業仕分けの対象に（11月）
- 国内外来トカゲに希少種でも駆除要望（11月）

★ 行政研究部会では部会員を募集しています。学会員以外の方も、準部会員として参加いただけます。詳しくは、
<http://www.wcsjpn.org/~gyousei/index.html>
 をご覧ください。